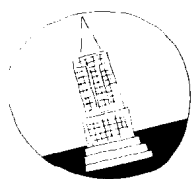


旅する人

玉村豊男

旅する人





ISBN4-10-355801-6 C0026

© Toyoo Tamamura, 1984, Printed in Japan

旅する人

一九八四年二月一五日 印刷

一九八四年二月二〇日 発行

定価 九八〇円

著者 玉村豊男
たまむらとよお

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一二一
編集部(03)二六六―五四二一

郵便番号 一六二

振替東京四―八〇八

印刷所 株式会社金羊社

製本所 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

旅する人 ■ 目次

第I章 旅先の二十四時

雷雨——ニューヨーク 9 浴池と啤酒——北京

18 バウンティー号の夢——フィジー 26

7

第II章 十三年間の昼寝——北アフリカ「旅」ノート——

事故 モラトリアムの気分 エル・ジャジダへの

道 消えた銀河 異邦人、または文学的稚氣につ

いて 移動 アバンチュール フェリアナの夜

トルコの隣り 大道芸人 ジャスミンの花

33

第III章 聖人通りはどこですか

半径一キロ半の日常 冬に旅をするいくつかの理

由 はじめてのパリの夜と朝 根無し人の街

81

第IV章 無一物の人

111

英国人 113 齒ブラシを一本持った男 119 民宿

稼業 125 古橋や…… 132 娼婦と名刺 136 パ

スポーツに関する若干の感想 141 海の聖マリア

——私のジプシー抄 146

第V章

ライオンバスと金魚鉢、

またはフランソワ一世の旅行靴

163

金魚鉢の引越し、またはライオンバスのガラス越

し ホテル料金考 西洋中世の旅行者たち 引越

しという名の旅 私の旅行靴 CONCLUSION

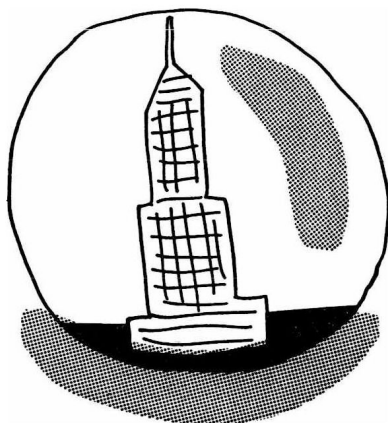
第VI章 DRINKING-UP TIME!

209

装帧·插画
安西水丸

旅 す る 人

第I章
旅先の二十四時



雷雨——ニューヨーク

右手には長方形の空があり、左手には三角形の空がある。

長方形の空は夕焼けで、三角形の空には満月が浮かんでいる。

マンハッタンの夕刻、ビルの二十八階の窓から見える風景である。

ニューヨークでは、空はさまざまのかたちに切り取られて人の目に映る。超高層のビルに囲まれた街路を歩く人々にとって、地平線はすなわちビルの輪郭にほかならない。

この町の中心部を空の上から眺めると、高層ビルの群れはひとつの巨大な塊りとして屹立しているように見える。

その塊りにタテヨコ十字に深い刻み目を入れた、その刻み目が道路である。

道路は深い谷底にあるのだ。

だから左右のビルにはさまれた一本道を歩いているときにはあたりが暗く、十字路に出るとようやく空の明かるみがわかる。たとえばクルマに乗って目を閉じていたとしても、その道がどこで他の道と交差するかは瞭然だ。交差点にさしかかると、閉じた眼蓋^{まぶた}の裏がほの明

かるくなるからである。しかしその十字路を過ぎるとすぐにまた頭上の空は一本の細長い矩形に戻って、眼蓋に届く光も弱くなる――。

一九八二年六月二日。

ニューヨーク、ケネディ空港には昼前に到着したのだが、マンハッタンのホテルに着くまでにはずいぶん時間がかかった。

交通渋滞がひどい。

とくに市内に入ってからのは混雑は凄まじいもので、つながったクルマの列はなかなか動こうとしない。道が東西南北に十字を描いているだけの街では横道を抜けて混雑をかくぐるといふことも不可能らしく、運転手はただひたすら信号の変わるのを待つて余ったエネルギーを外に向かつて罵声を上げることに費している。

ほとんど動かないクルマの間に、わずかの隙を見つけて強引に割り込んでくるドライバ―がいる。

走り出そうとするクルマの前を、横から飛び出してすり抜けていこうとする男がいる。

クラクションが鳴り、怒声が飛ぶ。

私は重いからだを背もたれで支えて、強い光の下を歩く人々を眺めていた。

女たちが、髪に風を孕ませながらたしかな足どりで歩いている。

大股で歩き過ぎてゆく二人の女のわきで、植え込みの石壁に腰をかけてサンドイッチを食べている若い男がいる。

その男に、向こうからやってきた黒人の青年がなにやら声をかけた。

黒人は盛り上がったヒップをジーンズに包み、上半身は薄い黒のタンクトップ一枚である。しなやかな胸の筋肉にかかった肩紐がズレて乳首が見えている。

クルマが少し進む。

交差点附近の車群をかきわけてパトロール・カーが急角度で曲がってくる。

その音に驚いて老婆が慌てて身を翻し、勢い余って舗道に店を構えているアイスクリーム屋の屋台にからだをぶつけてそこでまた一悶着が起っている。

屋台の前は銀行のようである。

現金輸送車らしいクルマが止まっている。

数人のガードマンが、腰の銃に手をかけたまま周囲を見張っている。

暑い。

タクシーに冷房はなく、窓を開けても涼しい風は入らない。入ってくるのは強い光と熱気と騒音ばかりで、ノロノロ運転を続けてどうにかホテルの入口にたどりついた頃には私はかなり困憊していた。

シャワーを浴び、ベッドに横たわる。

飛行機の疲れが出たのだろう、そのままウトウトとしたようだ。

眼が覚めたとき、私は一日のどの時間に居るのかわからなかった。窓の外は青く沈んでいたが、朝なのか、夕なのか。

高層ビル群に劃^{くわ}られた奇型の空の、ほの赤い夕焼けと薄白い満月。

それは昼と夜との境目も曖昧な人工の都市を、ふたつの時間に分けていた。

*

私が投宿したホテルは、ミッドタウンのビジネス街にあつた。

部屋は、二十八階。建物の中ほどに当る階の、廊下の突き当りにある。アベニューに面した大きな窓からは、向かいのビルの中がよく見える。

朝七時である。

夜は完全には明けきっていない。

その始業前のビルの整然と並んだ窓に、一つ、二つ、三つ……ポツリポツリと明かりが灯りはじめる。

広いオフィスである。中央に大きなデスクがあり、その周囲に華やかな色のイスが配されている。デスクのわきにはファイリング用の箱や棚。書類はきちんと整理されている。

そんなオフィスに、朝早く、一人の男がやってきて明かりを灯し、黙々と机に向かつて仕事を始める。

窓に面した明かるい部屋を占拠しているのは、彼が重要な地位にいる男であることを示しているに違いない。ビジネス・エリートだからこそ、誰よりも早く出勤してきて、誰よりもよく働いているのだらう。私はその男の姿を向かいのホテルの窓から見下ろしながら、ル

ームサービスのコーヒーを飲みはじめた……。

男はブルーのスーツの背をこちらに向けて仕事をしている。

私はその背に視線を据えたまま、男の朝の時間を想像してみる。

彼は……そう、マンハッタンからクルマで一時間くらいのところに住んでいる。

緑の美しい住宅街である。広い家に、美しい妻、そして素直に育った子供たち。うむ、幸せな男だ。

朝は五時前に起きてジョギングをする。シャワーを浴びてから、朝食。朝食は若く優しい妻がちゃんと用意しておいてくれる。そして爽やかな朝の会話を交わしたあと、スーツに着替えて出勤する。会社着午前六時五十分。早速仕事にとりかかり、平社員が出勤してくる時間にはとくに懸案のひとつやふたつはかたづけてしまっている、彼はビジネス・エリート……

……なのだろうか？

まあ、おそらくはそれに近いのだろうが、待てよ、ひよつとすると彼の家庭は幸福どころか破滅の危機に瀕していて、妻とは離婚調停の最中かもしれないし、子供が手のつけられない問題児なのかもしれない。仕事だって決して順調ではなく、きょう朝早く出てきたのだってなにかとんでもないミスをしてかした後始末のためかもしれないし、あるいは使い込みがバレそうになったための帳簿の改竄^{かいざん}か、それとも経営不振でツメ腹を切られそうになっての悪あがきか……

……そうだとしたらあの男もずいぶんかわいそうな男だなあ。

と、勝手な想像ゲームを愉しんでいたら、突然その男は椅子から立ち上がって振り返り、窓際へやってきて外を眺めはじめた。

視線が合うとまずいので、私は横を向いてコーヒーを飲んだ。

*

ある人のオフィスを訪ねてマジソン街のビルに出かけて行つたのは、その日の午後のことだった。

教えられた通りの番地に建っていたのは白い壁の高いビルで、入口はスチール製の重い扉に閉ざされていたが、その重い扉を両手で、体重を預けるようにして押し開けると、目の前に広大な空間が拡がった。

六十階ほどあるそのビルはどうやら新しくできた建物らしく、オフィスやアパートを夥しく抱えた巨大なものであったが、その巨大なビルの一階から三階あたりまでが全面の吹き抜けになっていて、ひとつの広大な室内空間をかたちづくっているのだった。

窓のない、間接照明でうまく照らし出されたその閉鎖空間は、自然の光に包まれた野原と変わるところがなかった。

周囲には樹木が植え込まれ、中央の花壇には花が咲き、壁面につくられた滝からは絶えず水が流れ落ちている。